essais こころみ　2024年4月

2024年4月1日（月） 晴れ

新年度の始まり、天気も晴れて、上々のすべりだし。先週末からいっきに春めき、着るものも一変。さっそく真冬物は土日のうちにしまい込んだ。今週半ばに少し気温がまた下がるようだけど、もう春本番。

― “慣れるまで、慣れるまで…” ―

2024年度が始まった。今日からまったく新しい環境になるという人は、どういう心境で今日をすごしているだろうか。これまでの長く慣れ親しんだものが心身にそなわり、新しい生活に慣れるには少し時間がかかる。

先日読んだ『中井久夫集3』の中に、しっかり、そのことが書いてあった。一定の周期で、ちょっとネガティブになりやすいというもの。個人的には転職の時にそんなことがあった。今でも実感をもって記憶している。

会社員時代の生活パターンから独立後の生活スタイルが定着するのにもそれなりの学習が必要になる。自分で自分をマネジメントしていかないとだめだから、最初はのんびり構えていても、ある時目が覚める。

さてさて、環境が大きく変ったという人は、少々気持ちがざわついても、それも一つの通過儀礼ととらえて、緊張をやわらげ、“心身が慣れるまで、慣れるまで…”と〈呪文〉でも唱ええて、過ごしていきましょう、ね。

― 4月1日の『中井久夫集3』より ―

若い人が、お相撲の押しというのは、足の裏で加減して、足の裏をセンサにとしてやっているんだから、足の裏のセンターというのは非常に重要なんだと言いました。

なるほど、足の裏のセンサーが正しくて、はじめて肌によく触れることができるということなんですね。だから、数人やりますと、足の裏が敏感になりすぎて、夜寝ていても、足の裏がジンジンしてくるんです

とくに病気のひどい人をみると、相手のゆがみがこっちに伝わってくるのか、体の調子が数日おかしい。ことに、指先と足の裏がおかしい。非常に足の裏が敏感になってしまうんです。

― 4月2日の『中井久夫集3』より ―

自分を熱交換器にして温めるという話を思い出すんですが、何でこんなことが起るのだろうと思ったら、二つのことが連想されてくるんです

一つは、赤ちゃんがおなかの中にいるときは、母親の脈が速くなると赤ん坊の脈も速くなります。これは、ここ十年ぐらいよく知られてきたことです。だから、母親が不安になったら、胎児も不安になるということです。

このように人間というのは接触している場合には脈が同期化する傾向があるということです。

もう一つは、人間の肌と肌が触れ合うというのも、親しくなるということですが、そういうことも、単なるスキンシップの問題ではなくて全身の問題かもしれない。

たとえば、恋人同士が手をつないだり、友人が手を握るという場合、非常に適切にしっくりい触れたきには、脈拍も合っているのかもしれない。お互いの体のいろいろな係数が合っているのかもしれないわけです。

－ 4月4日の『中井久夫集3』より －

ぼくは、ある患者さんにものすごく教えられたんですが、その患者さんは、それまでニキビなんかが出ていて、非常に汚かったし、妄想や幻覚からなかなか抜けでられなかったんだけれども、ある時、非常にスカッとした顔をして現れたんです。

その人を数年見ているものだから、いったい何事が起ったんだろうと思って聞いてみたら、だれもはっきり言えない。とにかくやったことを全部言ってくださいとお母さんに聞いたら、この一ヶ月のうちに、足の裏のウオノメを取って歯を治しましたというんです。ぼくは、あ、これかもしれないと思ったんです。…

2024年4月5日（金） 薄日

晴れてはいるけど薄い雲がひろがっている。歩くには陽ざしが眩しくなくてちょうどいい日和。大阪市内の桜はほぼ満開。今夜は大阪城公園も靭公園もたぶん、酒宴の広場。

― 信頼関係 ―

今朝読んだ『中井久夫集』にも書いてあった、「人間というのはすごいものです」。ほんとうにそう、身体バランスも、心のバランスも、ただ一つのことで、ある境地に達したり、そこから解き放たれたり。そんなことを考える機会が直近にあった。

『言うは易く行うは難し』の典型、「信頼関係をきずく」。もし実現できたと暗に確信できる相手がただ一人であっても、人間は幸福感にみたされる。たくさんして、そのぶん幸福感が倍増するものでもないと覚った。

大切な人をあの世へ送る。残されるものの悲しみは深い。けど、まず考えるべきは、この世を去る人の心の解放だ。父の時はまだ幼かったけど、母の時にそう意識でていたら…と自分の未熟さを省みた。

突然おとずれた別れの現実。戸惑い、動揺し、地団駄踏む気持ち。それをふっきったのが、「信頼関係」。たがいに信頼し合える人に出会えた偶然性と運命を想い、幸福感へといざなわれた。

ひと事ながら、本当によかった。わたしも教えられた。

－ 4月5日の『中井久夫集3』より －

昔からいわれるお灸のツボとか指圧のツボというのは何なのだろうと思うと、身体のイメージを正しく保つというか、どんな予期しない変化に対しても咄嗟に対処できるように保っておくために重要な戦略な地点かもしれないという気がするんです。

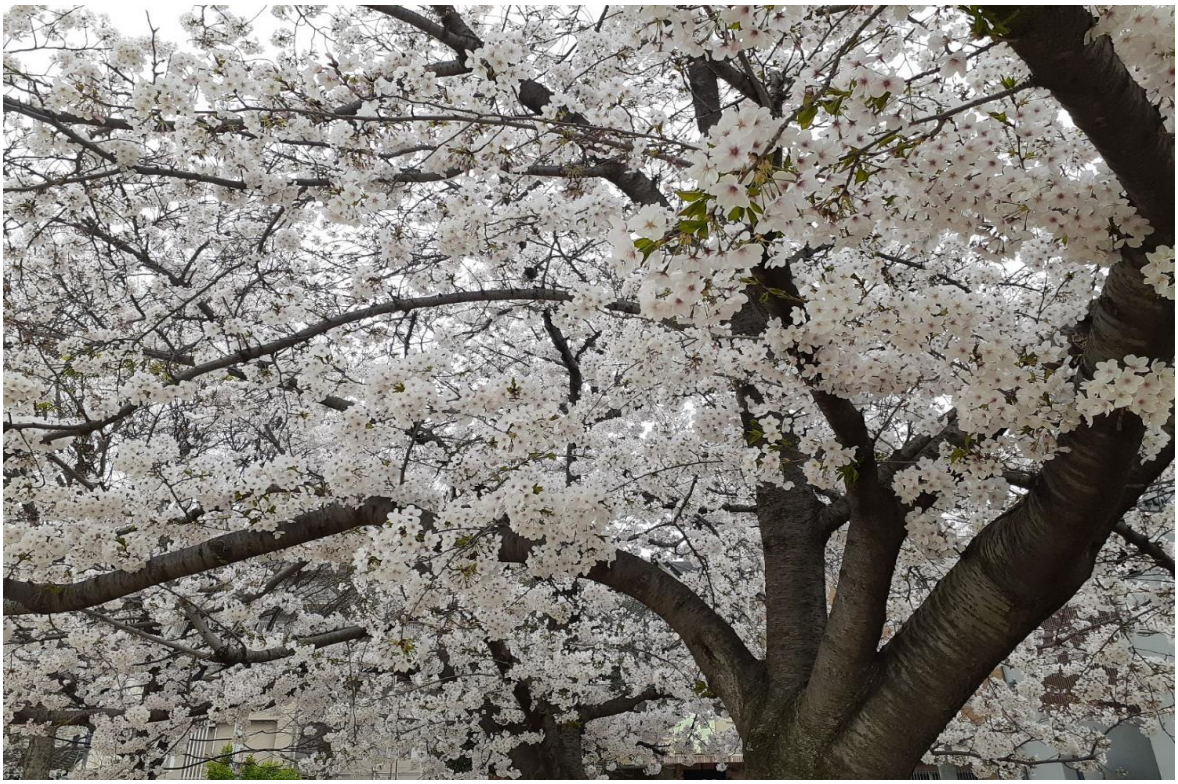
綱渡りなんかを見ていると、足の裏の感覚と体の平行感覚、重量感という広い意味での身体イメージだけであれだけのことができるわけですから、人間というのはすごいものです。

人間だけでなくなてく、サルだって何だって生物はそうですけれども、恐ろしいほどのバランスのとり方ができる。といっても、バランスをとるための要所というのはあるはずなんで、それがツボとかそういうものではないだろうかと思ったわけです。…

2024年4月6日（土）　町なかの公園でも良い花見

雲がちだったけど、晴れ間ものぞいて、暖かく、動けば汗ばむ陽気。桜はほぼ満開、どこも大変な人出だと想像。他府県に住む友人から京都へのお墓参りのあと、もし会えれば大阪へ向かうと連絡がありましたが、「今日はやめておいた方がいい」と、またの機会にしました。

夕方、買い物がてら近くの公園の桜の木の下で一服。



2024年4月8日（月） 曇→雨

今日は曇りから雨の予報。明日あさっての気温は10度台になるらしい。昨日ウール系はすべてしまったので、重ね着してしのぐしかない。それにしても、昨日おとといは絶好の桜見日和だった。買い物がてら、近くの小さな公園でも十分堪能。

— 自分の裁量 —

日の出時間が5時台半ばになり、寒さもおさまって、起きやすくなった。超朝型がもどってきたが、今のところはまだ外は暗い。音の無さは同じでも、静寂感はぐっと増す。

鳥が鳴き出すと日の出も近い。たぶん、30分ぐらい前。天気がよければもっと早い気がする。他に音がないから、遠くで鳴いていそうでも、聴こえて、耳に和む。

早朝は電車の本数が少ないから、時刻表に合わせて家を出る。といっても、10分間隔だから、どうってことない。それに乗っている人もけっこう多い。都市生活者の労働は多様。

意外に7時台の方が空いていて、8時前になると、絵にかいた「通勤ラッシュ」。もう久しく8時台の電車には乗っていない。こう遠ざると、他に予定がない限り、遅寝しても、ズラす。

そういえば、ずいぶん前、元銀行員の診断士の知人が、「あの通勤ラッシュに合わずに済んだのが一番よかった」と言っていた。独立して大変だけど、もう一度あのラッシュに合うぐらいなら、今がいい、と。

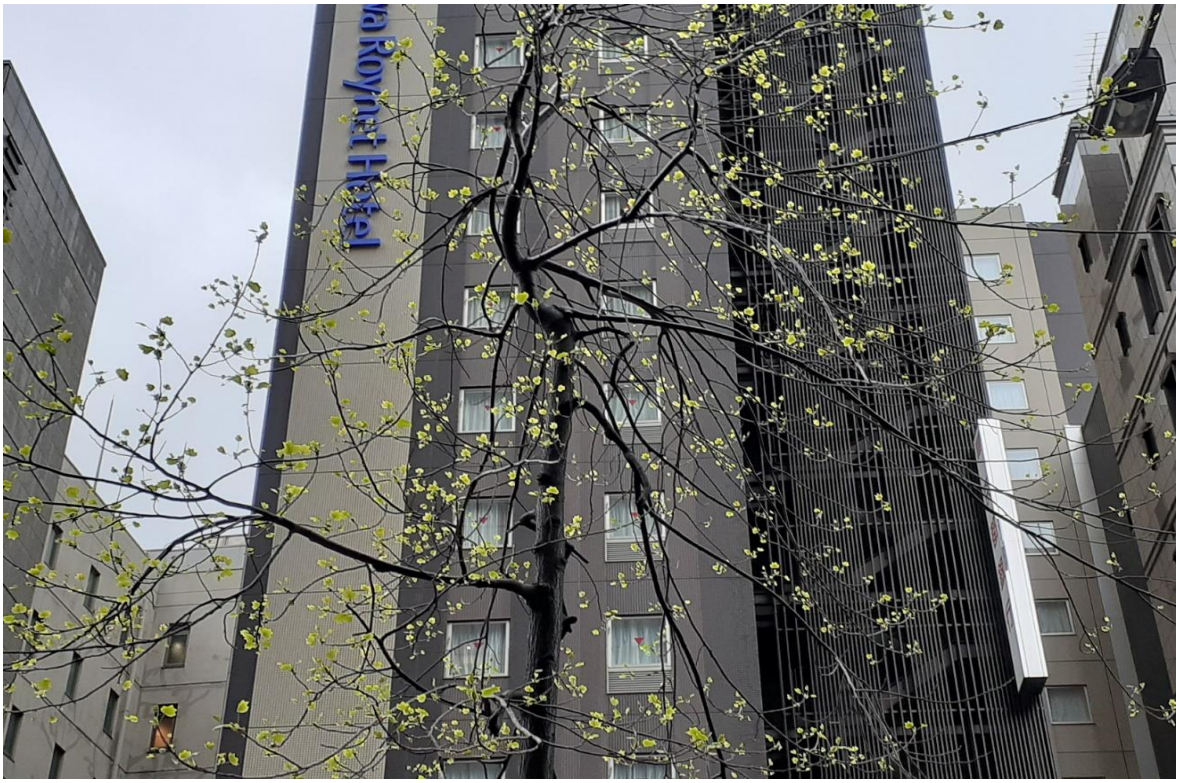
気持ちはわかる。通勤ラッシュだけでなく、ある程度自分の裁量で生活できるのが何より。時間の使い方、学びのし方、そして遊び方も。超朝型が可能なのも、自分の裁量がきくからでしょうね。

— 4月8日の『中井久夫集3』より —

不安のにおいというのは、リルケの『丸ての手記』のなかに出れくるんですけれども、こちらを遠ざけさせるにおいなんです。つまり、その場から去らせたくなるにおいなんですね。

不安になった人間が放つにおいというのは、ひょっとしたら他の個体を去らせるような作用をしているのかもしれない。だから、不安になった人が孤独になっていくということは、大いに考えられるわけです。

2024年4月9日（火）　　北浜駅前、堺筋の街路樹に新芽



2024年4月10日（水）晴れ

すっきり晴れて、空気がキリっとして、ちょっと寒いけど、気持ちがいい。今日はしっかり暖かくしてきた。昨日おとといと油断して、鼻がぐずぐずした。やはり体は温めないといけない。

― 気後れしても ―

ずいぶん前に出た本で、憂うつでなければ仕事じゃない、というようなタイトルのものがあった。大事な仕事ほど憂うつになるもの、これは言えている。

事の重大さがわかるから、憂うつにもなるわけで、でもいったん手をかけると、集中しだして、気ものって、終わってみれば達成感を得る。そのうち、憂うつも自分で手なずけられる。

大事な仕事のもっと手前で、自分のやりたいことをやるのに、身内の理解を得ないとダメなときは、そう簡単にOKされないとわかっていると、憂うつだけでなく、「気後れ」に包まれるかもしれない。

冷たくあしらわれる、詰問される、あるいはそもそも話を聴こうとしない等々、相手の言動や場の雰囲気などがありありと目に浮かべば、気持ちが引いてしまうし、心がひるむ。

勝手にやるのも選択肢ではあるけど、やはり正面きってコミュニケーションを図ることは、先々の軋轢や葛藤、トラブルを防ぐためにも意を決したいところ。

真意、心情、志などを、〈腹をわって〉話す場を創る。そういえば、「女性チャレンジ応援拠点」の〈ニュース 2022年8月号〉にそんなことが書いてあった。

ともあれ、気後れする自分を超えなければいけないときがくる、自分の道を拓こうとすれば。

― 4月10日の『中井久夫集3』より ―

からだのゆがみというのは、その人の生き方とかものの考え方とかが、身体イメージに影響を与えていることかもしれません。

イメージというと、頭に浮かぶ視覚的なものという感じですが、そうではなくてもっと立体感覚といいますか、もう一つの身体みたいなものですね。それをみんな抱え込んでいるんでしょうね。それも絶えず動くかたちで…。

動態的に維持されているというんでしょうか。ぼくはそれを動態保存という言葉から出してきたんだけれおも、動態保存というには、SL（蒸気機関車）を保存するとき、いつでも動けるように保存するのが動態保存だそうで、・・・

― 4月11日の『中井久夫集3』より ―

（R・Dレインは）私には、道を求める人というよりも、救いを模索する人に見える。

2024年4月10日（水）　「女性チャレンジ応援拠点」の担当日、早めに出て、近くの公園へ

2024年4月12日（金） 晴れ

今日も気持ちよく晴れている。昨日より気温が上がって、日中は24℃まで上がるとか。ただ朝晩は冷えるから、油断するといけない。温める箇所はしっかりあたためて、体調管理。

— 歩く、書く —

今朝の『中井久夫集』を読むうちに、過去の光景が頭に浮かんできた。なごりの桜を眺めて散策した大阪城公園、京都北山の植物園。

趣味らしい趣味はなく、人に尋ねられれば、冗談まじりに「生きること自体が趣味のようなものだから」と言ったりする。案外、ホンネ。

散策の習慣は10代の時についた。塾の先輩先生に京都へつれていってもらったのが、始まり。街なかではなく、自然や文化的なところ。

山、森、林、池、花壇。それらを目にしながら、歩くだけど、その時点で考えていることの、新しい視点がスーと起ち上ってくる。

インバウンドで2019年以来足が遠のいてしまったけど、何か考えごとをしたい時には必ず出かけた。

モンテーニュが『エセー』の中で思考するときは歩くと書いていた。歩くと脳が活性化するというから、理にかなっている。ヒラメキも少なくない。

ヒラメキや考えの巡りを、休憩がてらどこかに座り、小さな手帳に書く。そんなことを3度ぐらいは繰り返すか。

書いたそれらをまとめる。話す、書く、算ずる、憶える、まとめるの5つの知的活動の、〈まとめる〉。これが精神への定着につながるのだと思う。

歩く、書く。たぶんこの2つが自分にとって最適なセルフケアアプローチ。

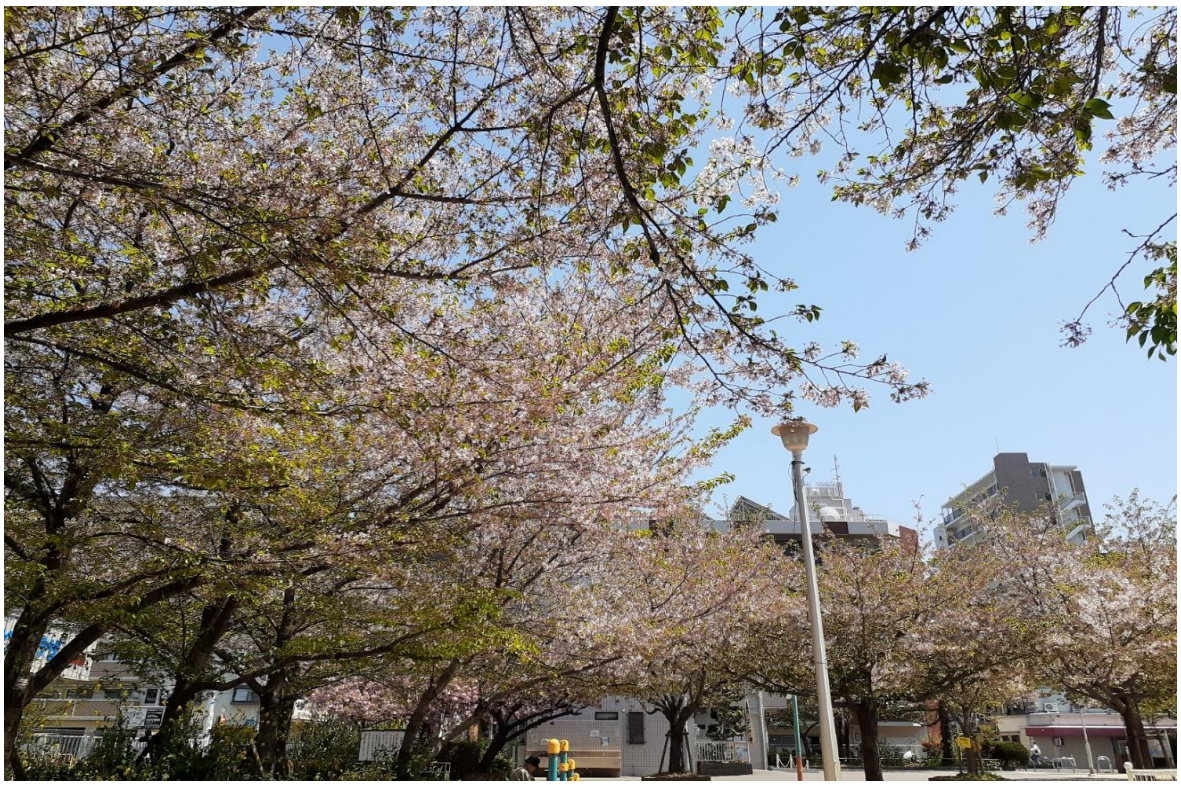
— 4月12日の『中井久夫集3』より —

私を押し包んでいたのは、この、かすかな予感とだだよう余韻とりんとした現前との、息づまるような交錯でもあった。ニセアカシアは現在であった。桜は過去であり、金銀花はいまだ到来していないものである。それぞれに喚起的価値があり、それぞれは相互浸透している。

2024年4月14日（日）　　近隣の公園の小さな公園でなごりの桜見

よく晴れて、絶好の行楽日和。知人のたっての希望で簡単なお花見。目の前にスーパーがあり、お寿司のパックをいくつか買って、もちろんビールも一緒に、昼飲み。

お日柄もよく、小さなしあわせ。



八重桜は今が見頃

2024年4月15日（月） 晴れ

空全体にうすい雲がひろがっている感じで、陽ざしはにぶい。明日あさっては、雨マーク。昨日おとといはすっきりと晴れた。とくに昨日の日曜は絶好の行楽日和。近場でなごりの桜をたのしんだ。

― みえる？ ―

6年ほど前だったか、別の人から立て続けに「見えるんでしょうね」と言われた。人の未来が見える？ まさか。見えるわけではないけど、それなりに話を聴いた場合は、たどりそうな道のりはなんとなく想像できる。

そういったことの、中井先生的にいえば、基底的な能力はたぶんある程度備えているのだろうと思う。会社員時代の若い頃に上司に言われたことがあるから。

自分では当たり前すぎてさほど着目してこなかったことを、中井先生の本を読んで、もっと注目すべきだと考えるようになった。そこで今年は特に、微かな察知、感知をけっしてやり過ごさないことを心がける。

『他人にもっとも役に立つようにするためには、現在の自分にとってもっとも役に立つようなことをすればいい』（ヒューブレイザー）

― 4月15日の『中井久夫集3』より ―

「この世界が、はたして記号によって尽くされるのか。なぜなら、記号は存在するものの間で喚起され照合され関係づけられるものだからだ」。「世界は記号からなる」という命題にふっと疑問を抱いた。…

「世界は記号によって織りなされているばかりではない。世界は私にとって徴候の明滅するところでもある。それはいまだないものを予告している世界であるが、眼前に明白に存在するものはほどんど問題ならない世界である。

これをプレ世界というならば、ここにおいては、もっともとおく、もっともかすかなもの、存在の地平線に明滅しているものほど、重大な価値と意味とを有するものでないだろうか。それは遠景が明るく手もとの暗い月明下の世界である」。

― 4月16日の『中井久夫集3』より ―

「世界は、索引でもある。手近かにはプルーストだろうね。一枝のサンザシが、すりへった石段のふみごごちが、三つの塔の相互関係的変転が、紅茶にひたしたマドレーヌ菓子が、それぞれひとうの世界をひらく。

「索引」とはいささか殺風景なことばだが、一見なにほどのこともないひとつの事象がひとつの世界に等しいものをひらくわけだ」。

「そう、たとえばアカシアの並木は私にはひとつの世界をひらく鍵だ。おさない時、私は宝塚市小林の聖心女学院の下にいた。その通学路のニセアカシアのかおりは、私の幼年時代をひらく魔法なのだ。

こうやってひらかれるものと、現前にあるものとのあいだは、同一世界内の記号間の関係ではないね。記号は、ひとつの世界の一部であるのだから」。

― 4月17日の『中井久夫集3』より ―

予感とは、「徴候を把握しようとする構えが生まれる時の共通感覚」、「明確な徴候以前のかすかな徴候―プレ徴候というべきもの―を感受していること」。予感は微分的。

余韻とは、経験が分節性を失いつつ、ある全体性を以て留まっていること」。余韻は積分的。

冒頭の一節を回顧しよう。ニセアカシアの花は、来るべきさかんな夏の予感でもあり、近く開花するであろう金銀花の現出することによる、この木立の変身のほぼ確実な徴候を荷うものでもある。これに対して桜木のかもすふんだんな余韻は積分的である。

2024年4月18日（木） 雲→晴

昨夜日付が変わる直前に愛媛周辺で最大震度6弱の地震。知人が住むところは震度4だった。たぶん大事には至っていない。さて、京阪神は…、どうしてもそう思ってしまう。

― 雰囲気、気配 ―

普段からよく使っている言葉だけど、いざ説明しようとすると言語化がむずかしい。今朝よんで下段にも少し紹介している「雰囲気」。

「雰囲気」は、辞書では、「 1 天体、特に地球をとりまく空気。大気。 2 その場やそこにいる人たちが自然に作り出している気分。また、ある人が周囲に感じさせる特別な気分。ムード」。

説明の第一に空気、大気そのものが挙がっている。そうだったのか、ちょっと意外な感じがした。その上で、場の醸す空気感。その場に複数の人がいたとして、同じように感じとっているはずはないだろうから、もし個々の程度を測れたら、どうだろう。

今朝よんだ中に、『ウェーバー・フェヒナーの法則』というのがあった。調べてみると、「感覚の大きさは、刺激強度の対数に比例する→刺激の弱いうちは感覚の大きさが上がりやすく（敏感）、刺激が強くなると感覚の大きさは上がりにくく（鈍感）になることを表す」。なるほど、それは経験的にわかる。

「雰囲気」と同じように「気配」というのも、なかなか言語化はむずかしい。辞書では、「 はっきりとは見えないが、漠然と感じられるようす」。古くは「けわい」といったらしい。

2年前の日経日曜版に「気配」がとりあげられていた。研究者の大学の先生いわく、「人間はもととも音の知覚能力によって気配を察知し、身を守ってきた」。別の研究者は触覚からアプローチしている。

視覚障がい者は聴覚が相当に磨かれているらしい。一般には味覚以外の視覚、聴覚、嗅覚、触覚がセンサーになって「雰囲気」や「気配」を感じとる。いやいや味に色で感じような〈共感覚〉の人もいるから、やはり五感全体か。

「雰囲気」や「気配」を読みとる。これは危険を未然に防ぐことから、問題解決の糸口を見つけることまで、あるいはもっと多様なアプローチの前段で、かなり重要。暗黙のうちにそうわかっていた気がするが、あらためてしっかり意識しよう、そうしよう。

― 4月18日の『中井久夫集3』より ―

私のいう索引は必ずしもことばではないが、過去の何かを引き出す手がかりである。むろん純粋索引というものはない。これに対して余韻はたしかに存在したものあるいは状態の残響、残り香にたとえられるが、存在したものが何かが問題ではない。驟雨が過ぎ去った直後の爽やかさと安堵と去った烈しさを惜しむいくばくかの思いとである。

ところで記号的、比例回路的・ウェバー・フェヒナー的世界において予感あるいは余韻に相当するものは何であろうか。

かりに、それを現前世界の「風合い」と呼ぶことにすれば、それは、たとえばわが国の美学にいう「渋み」であり、あるいはカミュの『異邦人』における「世界の無関心なやさしさ」というものがそれに当たるのであろう。

まとめて雰囲気と言おうか。現前世界の「味わい」であり、世界の側の共通感覚である。

― 4月19日の『中井久夫集3』より ―

観念には匂いと非常に似ているところがある。まず、それはいっときには一つしか意識の座を占めない。二つの匂いが同じ強度で共存することはありえないが、、観念もまた、二つが同じ強度で共存することはーある程度以下の弱く漠然としたものを除いてはーきわめて例外的で、病的な状態においてかろうじてありうるか否かというくらいのものである。

両者とも、起こそうとしておこせるものではない。観念も、意識的にというか人工的に催起させられるものではない。

両者とも、基本的には意識を「襲う」ものである。少なくとも重要な気づきは、はげしい香りと同じく、ひとを打つのである。科学的、思想的発見であっても、パースナルな気づきあっても。

2024年4月22日（月） 雲

ときどき陽がさすけど、ほぼ曇り空。明日あさってはまた雨の予報。この週末から大型連休、間の平日三日間を休める人、ずっと仕事の人。それぞれ、どのぐらいの割合かしら。

― 感情をととのえる儀式 ―

今日の朝刊に、「怒りを抑えたいなら…、感情書いて捨てるべし」という見出しが目にとまった。名古屋大学のチームの実験結果を紹介していた。

怒りの感情を紙に書いて、ゴミ箱へ捨てる。あるいはシュレッダーにかけるのも同じような効果があったらしい。紙に書いて、伏せるだけでは抑える効果はなく、しっかり〈捨てる〉という行為が大事らしい。

これはわかる。些細なことでも怒りをおぼえるなら、小さなことでまた感情が切り替わるのが人間、書いて捨てるといった〈儀式〉をとりいれるのは一つの知恵。

3年前の事務所引っ越しの時、過去にいただいた名刺や葉書、手紙、そして写真を全て整理することにした。記念碑的なもの以外、処分することに決めたのだけど、ただ捨てるのでは忍びない。

そこで一つ一つ確認しながら、シュレッダーにかけていった。ほぼ一ヶ月ほど時間を要したけれど、作業中も、終わってからも、なんというか、礼は尽くした、という気持ちが持てた。

今ふり返っても、ああいう風にして本当によかった。過去の出会いと交流に敬意をはらい、自分の未完自業史を彩ってもらったことへの感謝をこめ、モノは無くすけど、思い出としては残す、残る。

ところでかの実験、メールや電子ファイルの削除での効果はこれから検証するらしい。

－ 4月22日の『中井久夫集3』より －

匂いも、観念も、ごくわずかな原因物質によって触発される。観念もきわめて些細な、そしてしばしば意外な因子によって触発される。決して方法論に還元しえないと私は考える。採集の旅に専門家に同行してみよ。茸さがしの名人の後を追ってみよ。

精緻な「意識的方法論」に拠る研究は堂々たる正面玄関を持ちながら、その向こう側が意外に貧しい場合も皆無ではない。これは方法論に拠る人の問題でなく、方法論に拠るということ自体のもつ欠陥である。それは事後的追想あるいは批評にこそ適し批評家の有力な武器であるが発見に適しない。

観念は生き物であって、鮮度を失わずに俎の上にのせることにはある職人的熟練を要するのである。

－ 4月23日の『中井久夫集3』より －

本稿（「世界における索引と徴候」）は、私が久しぶりに本棚を整理していた時に突然浮かんだ「世界は索引ではないか？」という疑問符つきの命題（仮説的観念というべきか）にはじまる。

いくつかの本の背表紙が私を再読へと誘惑していた。背表紙は読書の記憶を喚起していた。本の表紙が索引として世界の中にあるとすれば、本文は何であろうか？

私の頭の中に引っ越しているその内容は？ かりに全文暗唱した場合ーわたしはしばしば好みの文章の暗唱を好むーは？

それは「メタ世界」とでもいうべきものではなかろうかと私は考えた。「超越的」ということばをためらった私は「メタコスモス」のことばに到達し、それから思い切って「メタ世界」とした次第である。

2024年４月23日（火）　　地下鉄北浜駅、地上に出てすぐ目に入ってきた新緑！

－ ４月24日の『中井久夫集3』より －

私が、柄にもなく予感と徴候、余韻と索引についての一文を草する気になったのは、結局、半分は、私の仕事である精神医学が、現前よりも、これら現前の周縁に揺曳するものに多く触れるからである。

ひとつは、私の気質である。私は、早くから、生きるということは、予感と徴候から余韻に流れ去り索引に収まる、ある流れに身を浸すことだと考えてきた。

2024年4月24日（水）お昼に買い物がてら天満橋へ、川沿いの遊歩道に季節感

― 4月25日の『中井久夫集3』より ―

徴候化は、対象世界にも、私の側にも起る。対象の側に起こる簡単場合には、山で道に迷った場合があろう。

「道に迷った！」と直観した刹那に、人はもはや眼前の美しい森やこごしい断崖に目を注がない。ささやかな踏みわけ跡らしきものを、けもみちであるか、先人のとおった跡であるかを見分けるために、ごく些細な徴候を捜して、明確な対象は二の次三の次になるだろう。

これが、世界が徴候化する場合のごくわかりやすい一例である。それが私の中に起これば精神の危機である。私の中に起るつかみどころのない変動のいちいちは、私の精神がバランスを失うかもしれない徴候である。この場合にも、私にとっては、日常の食事、睡眠、入浴が二の次になる。

2024年4月26日（金） 晴→雲

午後からすっかり曇り空になった。気温が高めで少しむしっとする。明日から大型連休、暑さに気をつけないといけないそうで、今年も夏ばかりが季節を陣取る？

― 〈捨て石〉をすてない ―

いま読んでいる「中井久夫集3」の中に〈捨て石〉という言葉が出てくる。治療者として患者さん一人ひとりのよりよい状態のために、「いつ生きるかわからない多くの捨て石を置く」。

このとき、自分にとっての〈捨て石〉は、こうして仕事とは直接関係のないことを書いたり、読んだり、憶えたりしていることかもしれないと思った。ちょっと違っていそうで、案外あてはまる。

いつ生きるかわからないけど、いつかは生きる。触覚の3要素のことをフィジカル系サロンの起業家に話したら、なんでそんなことを知っているのかという表情を浮かべながら、メモしていた。

さてその〈捨て石〉の何割ぐらいが実際に目にみえる場面で生きただろう。たぶん4～5%ぐらいじゃないか。約95%は自分自身の中で、情報をアップデートしながら醸成されている、そんな風に感じられる。

「わたしたちは一旦知ったことは知らなかったことにできない」（マーヴィン・ミンスキー）を思い起こすと、記憶にははっきりのぼってこなくても、精神に隙間があるとすれば、それを埋めている。

おかげで良い補強材になって、仕事全般に自分なりのものが備わってきて、誰かの目には頼もしくみえ、頼られる。かならず〈誰か〉であって、〈誰にでも〉でない点がミソ。

そういうことも含めて、〈捨て石〉の究極的な効用、ご利益は、大きく二つだなぁと昨日思いあたった。どちらもモンテーニュの言っていることであって、一つは「自分を教える」ためのものになっている。

そしてもう一つは、『自分の心により強い力にみちた備えを仕込んでおかなければならない』ためのものになっている。どちらもまだまだこれからもずっと努力が必要であるから、〈捨て石〉をすてることはできない。

― 4月26日の『中井久夫集3』より ―

もっとも、不安なしに対象世界が徴候化することはある。それは、狩人の場合であって、カルロ・ギンズブルグは、些細な足跡や草の倒れた形から獣が通った跡を推理する狩人の「徴候的知」を、歴史家、医師、推理作家などの方法の先駆として、この「知」による科学に「演繹」や「帰納」による科学と同等の「知」としての位置を与えることを主張している。

中村雄二郎氏に始まる「臨床的知」の概念は、つまるところギンズブルグの「徴候的知」であるまいか。この「知」は、意識的な「方法論」methodologyではなく、十八世紀の古くからいわれながらあまり取り上げられていない「セレンディピティ」による知であると私は思う。

2024年4月27日（土） 雲&雨

曇りマークばかりだったのに、小雨がずっと降っている。傘なしでもOK、長く歩くならあった方が無難という程度。お昼前から過ぎにかけて本町へいった。御堂筋は銀杏並木の新緑が目にやさしい。小雨ながら、『雨の御堂筋』

― 邂逅 ―

公的なものから民間のものまで、世の中には「資格」が溢れている。最近も人から教えられて初めて知った心理系の民間資格。念のため検索してみると、組織・団体の構成は社会的認知の高い人たちによるけど、民間だからか、受験料や登録料、更新料がやけに高い。

資格は未来を保証するものではない、過去の努力に対する一定の評価、そう受けとめている。とりあえず活動の機会は得られやすいけど、続くかどうかは力量、度量次第。

いまこう書きながら、スキル面をさす言葉として力量を使った。度量は、人間の〈器〉という意味のつもりだが、さて、この使い方は正しいか。念のために調べてみよう。

度量：1．物差しの升、転じて、長さと容積　2．他人の言行をよく受け入れる、広く大らかな心。ついでだから、力量：物事を成し遂げる力の程度。能力の大きさ。

広く大らかな心と物事を成し遂げる力。考えてみると、両立はけっこう難しい。広く大らかな心だと、小さなことには大目をみそうだし、物事を成し遂げるには小さなことを疎かにできないし…。

となると、広く大らかな心を優先するとすれば、物事を成し遂げる決め手は自分以外の他者ということになるか。よくデキた人にめぐり会うこと。逆の物事を成し遂げる力を優先するなら、小さなことにも嫌気のささない大らかな人にそばにいてもらう。

そんなうまいことといかない、出会わない。でも稀でもあるのはあるから、そういった時には出会いを特別に「邂逅」と呼ぶのかもしれない。ある本に「森有正」の一文が紹介されていた。『邂逅！ それのみが真実を開示する』

2024年4月27日（土）午後　　御堂筋の銀杏も新緑が目立つようになってきました。